

研究発表要旨

第一室

1. 四福音書における属格の用法

(司会) 愛知教育大学 小塚 良孝
日本大学 今滝 暢子

四福音書における属格名詞および of 句の用法について、ラテン語の影響を検討しつつ、そのすみ分けを考察する。

古英語において、名詞は属格形をとることによって所有をはじめとする種々の関係を表したが、後期古英語から中英語にかけて属格は衰退する。現代英語に属格は存在せず、*my*, *his*, *our* 等の代名詞、および接辞's にその名残が見られるのみとなっているが、それに代わるようにして守備範囲を広げ、多く用いられているのが of 句である。本発表では、変化の起こる前の段階、つまり古英語の資料において、属格と of 句がどう使い分けられ、その区別にラテン語の原文がどう影響しているのかを考察する。先行研究として Allen (2008) を説明したのち、古英語期の資料 *West-Saxon Gospels* に見られる属格の例を分類した結果を示し、それらの用例が先行研究の依拠する仮説によって矛盾なく説明出来るものかどうかを検証する。

言語資料として、Skeat 版の *Anglo-Saxon Gospels*, *Lindisfarne Gospels* を扱う。

2. Relative placement of the name and the title *king* in apposition: Its possible pathways of change

(司会) 愛知教育大学 小塚 良孝
白鷗大学 新川 清治

The present paper explains how preferred appositive constructions consisting of a name and a title have shifted from the types represented by *Alfred King*, *the King Alfred*, and *Alfred the King* in Old English to almost exclusively the type represented by *King Alfred* in Present-Day English through a comparative analysis of the patterns employed in the two extant versions of *Lazamon's Brut*, an Early Middle English metrical chronicle localized in the Southwest Midlands region. This shift appears to have involved not only apposition but also compounding and predication.

3. 英語 R 音をめぐる諸問題

(司会) 慶應義塾大学 堀田 隆一
大阪大学 神山 孝夫

印欧語本来の R 音が歯茎ふるえ音 [r] ないしたたき (はじき) 音 [ɾ] であったことは豊富な比較言語学的証拠によって明らかである。その一派ゲルマン語でも [r]/[ɾ] が広く行われ、ドイツ語、デンマーク語等の例外的な口蓋垂音 [ʀ]/[ʁ] がフランス語に生じた流行を模倣した新たな習慣であること、英語が以下の改新を経たこと、これらにおいても [r]/[ɾ] の

使用が尚も可能であること等を勘案すれば、ゲルマン語本来の R 音が [r]/[ʀ] であったことを疑う合理的な理由は見あたらない。

他方、ゲルマン語の一成員たる英語の歴史にも由緒正しい [r]/[ʀ] の痕跡は残るが、英語が古来の R 音たる [r]/[ʀ] を歯茎接近音 [ɹ] ないしそり舌の変種 [ɹ̥] に転じる推移を経たことは周知のごとくである。確かに巨視的な視座からすれば、英語における [r]/[ʀ] > [ɹ]/[ɹ̥] の推移に疑いの余地はない。だが、この推移の細部は未だ明らかでない。

事態解決へのささやかなきっかけともなることを願い、本報告においては英語における R 音の変遷にかかわる愚見を披露する。その過程では、ラテン語と並びゲルマン語古層に見られた rhotacism, 古英語における母音の割れ, 頻発する母音と R の metathesis, Northumbrian burr とも称されるハンバー河口地域の口蓋垂の R, また私案に属す /s/ に隣接する /r/ の消失といった諸現象に触れる。

第二室

1. *The Romaunt of the Rose* -A と原典の比較—sachiez, cuidier を中心に—

(司会) 日本大学 杉藤 久志
広島大学大学院 岩國 智子

本発表の目的は Chaucer が *The Romaunt of the Rose* -A を書く際に、古仏語原典をどの様に活かしたのかを考察する事である。

Eckhardt (1984) や Sánchez-Martí (2002) は原典 *Le Roman de la Rose* と *The Romaunt of the Rose* を比較し、“metaphrase”的であるのか “paraphrase”的であるのかなど、どの様な翻訳を Chaucer が行ったのか論じているが、時制や法を扱ったものではなく、接続法に関しても取り上げていない。また、聴衆への呼びかけに使用される挿入句に関しては論じられているが、本発表で扱う *sachiez* 「お分かりのように」に関しては触れられておらず、原典との比較、指摘がなされていない。

sachiez は動詞 *savoir* の接続法現在 (同時に命令法) の形で、聴衆への呼びかけに使用されている語である。具体例として、“*carachiez que mout li pesast*” (221) 「というのは、お分かりのように非常に重大な事だったろう」に対応する、“*For certeynly it were hir loth*” (233) がある。ここで Chaucer は *sachiez* を副詞 *certeynly* と書き換えている。中期英語に接続法はなく、古仏語原典から翻訳する際にどの様に翻訳していったのかを検証する事で Chaucer のオリジナリティが浮かび上がるのではないかと考える。

また、原典との差異が現れるもう1つの点として、*cuidier* 「思う」という語があると考えられる。*cuidier* は中世に特徴的な語で17世紀頃までは使用される、主観性を保持する語である (Marchello-Nizia, 1999)。例えば “*je cuit que s’ele conoissoit / le tres plus prodome qui soit*” (269-70) (*cuit*: *cuidier* の直説法現在) に対応する “*I trowe that if Envie, iwis, / Knewe the beste*

man that is” (281-82) で、Chaucerはtroweだけでなくiwisを加筆する事で、cuidierの持つ主観性を表していると考えられる。

本発表では上記のsachiezとcuidierを中心に扱い、Chaucerがどのような手段を用いて原典の仏語を英語で表しているのかを調査考察する。

2. チョーサーの夢物語詩の「鳥の囀り」と「ハーモニー」と「メロディ」

(司会) 福山大学 中尾 佳行
明治大学非常勤講師 小倉 美加

チョーサーは夢物語詩の中で、「鳥の囀り」の場面を頻繁に描いている。J.I.ウィムサット(1991)によれば、「鳥の囀り」とラブ・ポエムと(『鳥の議会』の)ヴァレンタイン・ポエムを結びつけたのはチョーサーであるという。さらにチョーサーは鳥たちは歌い(“synge”),「ハーモニー」(“harmony”)や「メロディ」(“melodye”)を奏でているとあるが、エリザベス・エヴァ・リーチ(2007)によれば、中世では「鳥の囀り」は“birdsong”と表現するものの「音楽」(“musik”)とは見なされなかったという。中世の大学では「音楽」は7科の1つであるが、甘美な「鳥の囀り」は、ボエティウスを通じて中世に伝えられた古代ギリシャの音楽理論の範疇には入らないことになる。現代でも「鳥の囀り」を音楽と捉えるかについては意見が分かれるかもしれないが、チョーサーは夢物語詩の中で「鳥の囀り」を「ソング」と言いながらも「音楽」とは一度も結びつけていない。しかし、チョーサーは、初期の夢物語詩の中で中世では音楽用語のキーワードである「ハーモニー」や「メロディ」とは関連づけている。それはなぜだろうか。

ギヨーム・ド・ロリスの古仏語『薔薇物語』前編と同様に、英訳『薔薇物語』前編でも「鳥の囀り」と「メロディ」とは結びついているが、「ハーモニー」とは結びついていない。その一方で、チョーサーの初期の夢物語詩『公爵夫人の書』、『鳥の議会』では「鳥の囀り」は「ハーモニー」と「メロディ」に関連づけられていた。つまり、「鳥の囀り」と「ハーモニー」はチョーサーの意志で結びつけられている可能性がある。中世音楽理論では「ハーモニー」は、古代ギリシャの音楽理論の中核を占めるハルモニア論を端に発する音楽用語であるだけでなく自然思想全体を貫くキーワードであり、重要な音楽用語である。夢物語詩の中でも「ハーモニー」と「メロディ」は天上の「音楽」と結びつけられている。教養のある宮廷人なら大学の7科の1つである「音楽」つまり音楽理論についてある程度の知識は必要であったが、宮廷人たちはその音楽理論に基づいた「音楽」ではなく、フランスの異性への愛を歌った「ソング」を好み享受していた。しかし夢物語詩の中では異性への愛の「ソング」は「ハーモニー」や「メロディ」とは関連づけられていない。フランスの世俗の「ソング」もまた中世音楽理論とは無縁と捉えられていた可能性がある。

その一方で、『善女伝』では(夢の中ではなく)現実の牧草地での「鳥の囀り」は「ハーモニー」や「メロディ」と一度も結びつけられていない。つまり、夢の中では「鳥の囀り」は中世音楽用語「ハーモニー」や「メロディ」と結びついていたが、現実の牧草地の場面では鳥たちの「ソング」とこの2つの中世音楽用語とは結びついていないことになる。鳥

たちの囀りは音楽理論用語とは無縁の甘美な囀りとして描かれていた。チョーサーの最後の夢物語詩の中での「鳥の囀り」と中世音楽用語「ハーモニー」や「メロディ」との分離は、何を意味するのか。チョーサーは音楽理論は大学や教会以外では難解で実用的とは言えないことから、夢の中で中世音楽理論への揶揄を表現したのではないか。発表では『カンタベリー物語』の「メロディ」の例もあげ、チョーサーが夢の中で中世音楽理論を揶揄している可能性を示唆する。

*文中の人物やチョーサーの作品の英名は省略した。

シンポジウム要旨

中世文献から見える「世界」と「世界の広がり」

—WHERE the east meets the west—

司会・総論 大阪大学他非常勤講師 藤井 香子

「中世」という時代区分は、ルネサンス以降の西洋歴史家達が自身のそれまでの歴史に与えた区分であり、「古代ギリシア・ローマ」とその継承者を自ら謳う「ルネサンス」との間、千年に亘る時間を様々な感情を込めて詠んだ名称である。つまり、「中世」に生きていた人々は、自らを「中世に生きている」と見なしていたわけでは勿論なく、彼らは「今の時代」を彼らなりに生きていると考えており、その「今」は、全く同じ形であったわけでは無いが、「古代ローマ」から継承された「今」であった。

「古代ギリシア・ローマ」から引き継がれたものは様々あるが、「東方」への関心・言及もその一つである。現在のようにマス・メディアやインターネットが発達した時代とは異なり、文献を読み、また作成・所有することが出来たのは一部の人々に限られていたが、少なくとも中世ヨーロッパの（読み書きが出来て文献に携われるという意味での）インテリ階級の人々にとっては、「東方世界」の存在と認識は、それに対する驚異とともに受容されていた。

しかし、中世イングランド地域の人々にとって、彼らが認識する「世界」「世界の広がり」の中で、「東方」がその認識の表層に再び明確に現れるのは 13 世紀以降である。それまでの彼らにとっての「世界」は、「東方」より手前に存在する他の人々によって埋められていた。

中世イングランドの人々が、自身を取り巻く、あるいは自身の向こう側にある「世界」とその「世界の広がり」をどの様に捉えていたのかを、「いつ」「どこで」「どの様に」(*WHERE*) 彼らが (the west) 「誰」(the east) と出会い、「世界」と「世界の広がり」を認識していたのかを、残されている文献のテキストから読み解き、再考してみることが本シンポジウムの目的である。Philological なアプローチを入口に、しかしそれだけに終わることなく、当時の人々の「世界」の認識が最終的に「東方」へと広がるまでの社会・文化を再考する一機会とすることも試みてみたい。

1. 古英語期の文献における「世界」、その認識と広がり

講師 立教大学 唐澤 一友

移動や通信の手段が非常に限られていたアングロ・サクソン時代においては、遠隔地についての情報は、文献や伝聞によるものが主であっただろうし、それすら十分にあるわけではなかっただろう。そのような時代において、イングランドの人々は「世界」をどのように捉えていたのだろうか。本発表では、アングロ・サクソン時代の文献を概観しながら、当時のイングランドの知識人の「世界」観が如何なるものであったかについて考えてみたい。その際特に、「東西」という概念に着目し、世界の区分とそのそれぞれの広がりについて、どのような理解がなされていたのか、そのような理解がどのようにして育まれたのかということについて考察したい。

大英図書館に所蔵される写本 Cotton Tiberius B.V には、現存する最古の世界地図のうちの一つで、アングロ・サクソン時代に作られたものとしては唯一の世界地図が記録されている。本発表ではこの地図を一つの手がかりとし、当時の古英語およびラテン語文献に書き残されたことと照らし合わせることで、この種の文献に触れることが出来た当時の知識人の間で知られる「世界」が如何なるものであったか、その中におけるヨーロッパやアジアの位置づけは如何なるものであったか、またそのような「世界」観の背後にはどのような伝統があるのかについて論じたい。

2. Anglo-Norman 語の「武勳詩」における「異教徒」＝「サラセン人」から見る「世界」観とその広がり

講師 名古屋大学 小栗栖 等
(フランス文学)

1) 『ロランの歌 (*Chanson de Roland*)』を初めとする最古の武勳詩群(11世紀末-12世紀)、
2) アンブロシウスの『聖戦の歴史(*Estoire de la Guerre Sainte*)』(13世紀初)、3) トマスの『ホルンの物語 (*Roman de Horn*)』(1170年頃)を比較し、そこに描かれた異教徒の姿を考察する。

これらの作品は、いずれもアングロ=ノルマン語の特徴が濃い写本で、今日に伝わっている。それぞれの所属するジャンルは、武勳詩、ロマン、歴史物語と、異なっているが、2)と3)には、武勳詩の強い影響が見て取れる。

だが、他方で、1)が程度の差はあれ歴史事実から題材を得るのに対し、3)は純粋なフィクションであり、2)は実際に第三回十字軍に参加した著者による生きた証言である。三者の間で、どのように異教徒の描き方が変わってくるか(あるいは変わらないか)を確かめてみるのは無意味なことではないだろう。ただし、退屈な比較を延々と続けるのではなく、中世フランス語文学の文脈のなかに、作品を位置づけるように心がけたい。そのため、上記の作品群の扱い方に、多かれ少なかれ、不均衡が生じ得ることは、あらかじめお断りしておきたい。

3. 「イングランドもの」ロマンス *King Horn* における「異教徒」＝「サラセン人」から見る「世界」観とその広がり

講師 大阪大学・摂南大学名誉教授 今井 光規

King Horn に描かれている「サラセン人」は、言語、年代、地理、人種、宗教などについて多様な問いを投げかける。そのなかには、今日の世界に繋がる問題も含まれている。問題によっては、中世時代にすでに論じられていたものもあれば、100年余り前からさかんに研究されるようになったものもある。いずれの場合にも、時代の流れとともに考え方や研究方法に変化が起こり、見直しが行われているもの、あるいは解決不可能と思われる問題もある。個々の問題について詳しい研究が多数行われているので、私はこれまでの研究に基づきながら、中英語ロマンスとしては最も早い時期のこの作品を、次の5項目を中心に検討してみたい。

- 1) 「サラセン人」を表す語について (Cf. *Sarasīn(e (n.(1))) MED*)
- 2) *Horn* が戦った「サラセン人」
- 3) アングロ・ノルマン語版 *Horn et Rimenhild* との関係
- 4) 作品の内外に見る「東西の出会い」と *King Horn* の位置づけ
- 5) 他者との出会い：“giant”あるいは“monster”について